

首都建設における日本人抑留者

八尾廣

社会主義時代の首都建設事業について、当時の建設の実際を今日に最もよく伝える映像記録がある。それは、第2次世界大戦後のシベリア抑留をめぐり、モンゴルに連行された日本人抑留者が建設現場で労働に従事する場面を撮影した7分間のドキュメンタリーフィルムである。2020年、読売新聞がモンゴル国立中央公文書館より入手し、2021年の時点でもウェブ上に公開されているのでぜひご覧になってほしい¹⁾。撮影されたのは1946年。服装や日差しの状況から季節は夏場であると見られる。この映像は日本人抑留者の記録であるが、同時に当時の建設技術を伝える意味でも極めて貴重な記録である。その映像には、レンガ壁の側面へのモルタル左官、トラックからの砂の荷下ろし、木材置き場からの太い角丸太の運搬、丸太の枝落としによる製材、設備用の鋼管パイプの荷下ろし、現場打ちコンクリートのミキサーでの練り混ぜ、一輪車や木製の台での資材運搬、屋根における鉄筋の配筋作業、図面を見ながらの打ち合わせ、コンクリート床の打設、レンガの積み上げ作業、金属板屋根材の葺設工事、等で路面に砂利を均す道路路盤工事といった、建物や道路建設のあらゆる場面で日本人抑留者が勤勉に働く姿がとらえられている。

1945年10月20日から12月10日までのあいだにソ連代表団からモンゴル側が受け取った抑留者は1万2,318名、そのほか、モンゴル軍に連行された者やスパイ行為の有罪者を含めると、1万2,326名いたようだ。当時の建設設計画に必要な総労働者数は2,000-2,400人と見積もられていたのに対し、建設業務管理局で用意できたモンゴル人労働者の数が1,200名であったとのことであるから、日本人捕虜が首都建設の労働力としていかに大きかったかがわかる（青木 2018: 8）。抑留者はこのあと1947年10月までの2年間、モンゴルの収容所に収容され、各種工場、倉庫、建築や道路の建設現場に送られ労働に従事させられた。モンゴル側からソ連側に引き渡す際に作成された資料によれば、日本人捕虜は第1・第5工場、コンビナート、病院、ガンダン地区、肉加工コンビナート、輸出倉庫、道路工事本部、第1・第2運送会社、レンガ工場、鉄製品工場、空港などの作業場、収容所を含め29カ所に配属されていた。日本人捕虜に対して与えられる食糧には基準量が定められていたが、回想や目撃者の話では十分な食糧補給がなされず、多くの捕虜が栄養不足のため病気となり死亡した（バトバヤル 2002: 64-65）。日本に送還された人数は1万705名、抑留中の死者数は1,618名といわれる。死亡の原因は身体がもたないほどの労働ノルマ、飢え、最低の生活状況、厳冬期のマイナス30℃を超える極寒であった（バトバヤル 2002: 63）。

モンゴル人留学生に聞くと、モンゴルでも若い世代の人びとの多くはこの事実を知らないという。極めて厳しい状況下に置かれた日本人抑留者が、なおそのなかでも勤勉な姿勢で労働に従事しモンゴルの首都建設を支えたこと、また母国への帰還を果たせず亡くなられた日本人が数多くいたことを、私たちは深く心に刻み記憶に留めなければならぬ。

1) 読売新聞オンライン「モンゴルに抑留された日本人の映像入手」(2020年4月3日公開) <https://www.yomiuri.co.jp/stream/article/14998/>